

進捗状況報告シート

(2011年度・大学)

担当部局は ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

対象部局	理工学研究科
大項目	7 国際交流 (研究科)
中項目	
小項目	7.0.1 国際交流 (国内外における教育研究交流) についての方針を明示しているか。
要素	(KG1) 国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の適切性
小項目	7.0.2 国際交流 (国内外における教育研究交流) を適切に行っているか。
要素	(KG1) 国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性 (KG2) 国内外の大学院間の組織的な教育研究交流の状況 (院)

II. 自己点検・評価 (2010.5.1~2011.4.30の進捗状況報告)

《目標・指標》

本項目において、2009年度~2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況の評価を行っている。進捗評価はA~Dの4段階とし自ら評価した。A~D評価は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 英語のみによる学位コースの設置により一層の国際化を図る。	→留学生数。	D	B	/	/	/
2. 教育研究の国際交流を緊密化する。	→国際会議、シンポジウムへの参加者数。	B	B	/	/	/
3. 国際人として相互理解を育む機会を拡大する。	→教員及び大学院生の海外派遣者数・海外からの研究員の受入数。	B	B	/	/	/

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→	/	/	/	/	/
	→	/	/	/	/	/

《現状の説明》 ※ 全小項目について記述が必要

★小項目 7.0.1	7.0.1 国際交流 (国内外における教育研究交流) についての方針を明示しているか。 (方針明示の有無) いづれかにチェックしてください。 →→→→→→→→→→ ○ 明示している ● 明示していない (方針) 関西学院大学の国際交流の方針は、新基本構想の新中期計画に「多文化が共生する国際性豊かなキャンパスを実現する」とうたわれている。この方針に基づき、国際教育・協力センターと連携して国際交流を進めている。
	(説明) 理工学研究科独自の国際交流方針については、学部・研究科内の国際交流推進委員会において、ホームページでの公開等も含めた検討を行っているが、本委員会の設置が2009年度秋であることから、実質的な議論を開始したのは2010年度からであり、方針の具体化は進みつつあるものの、まだ内容の確定や公開までには至っていない。
★小項目 7.0.2	7.0.2 国際交流 (国内外における教育研究交流) を適切に行っているか。 (説明) 理工学研究科の目標である英語のみによる学位コースの設置、教育研究の国際交流の緊密化、国際人として相互理解を育む機会の拡大という点を中心に説明する。 英語のみによる学位コースは、2012年度からの開設を目指し、理工学部国際交流推進委員会で科目構成や単位数等、カリキュラムの具体化が進んでいる。 研究教育の国際交流の緊密化については、学生や教員の海外からの受け入れや海外への派遣が次に述べるような状況にある。まず外国人留学生については、評価指標データにも記載の通り、2010年度は正規学生 (一般入試や外国人留学生入試で入学した学生) が10名で、増加傾向にある。また、インドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学とのツィニング・プログラムによる大学院特別学生を3名受け入れている。一方、在学生の海外への派遣は、国際会議での研究発表によるものが109件であった。 外国人教員・研究員の受け入れ数についてはほぼ例年通りで、2010年度は客員教員5名、客員研究員1名、受託研究員6名 (日本学術振興会外国人特別研究員4名を含む)、博士研究員5名を受け入れている。これらの人員による理工学部講演会も実施しており、2010年度の実施回数は10回であった。一方、海外への教員の派遣については、国際学会等での研究発表112件を含めて135件であり、増加傾向にある。 他に、2008年度より、吉林大学生命科学院との間で生命分野における教育・研究連携を強化するための協定を結んでおり、2010年度は、9月に長春で開催された第4回日中経済社会発展フォーラムにおいて、吉林省と関西地区の生命科学産業の協力提携をテーマとした討議を行った。

★ その他

《評価指標データ》

(特定指標データ)本項目は数量的なデータによる評価(現状分析)が可能のため、次のとおり指標を定め経年比較している。

【理工学研究科】			単位	2006	2007	2008	2009	2010	2011	備考	
指標1	国際交流協定締結機関数		機関	—	—	—	—	—	—		
指標2	国際交流協定締結国数		国	—	—	—	—	—	—		
指標3	海外からの受け入れ学生数	国数	国	—	—	—	—	—	—	累計数	
		外国人留学生	正規	人	5	4	8	8	10	12	・※5/1現在(学校基本調査) ・正規とは学位取得目的 ・特別学生を含む
			交換	人	0	0	0	1	0		・累計数 ・交換は正規以外とする。 ・大学院短期留学を含む
		外国人留学生在籍学生比率	正規	%	2.0	1.4	3.1	2.9	3.6	3.9	外国人留学生÷在籍学生数
			交換	%	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0		
その他 (セミナー等による受け入れ)	人	—	—	—	—	—	—				
指標4	海外への派遣学生数	国数	国	—	—	—	—	—	—	累計数	
		人数	長期	人	0	0	0	0	0	0	・累計数 ・1学期以上を「長期」
			短期	人	0	0	0	0	0	0	・累計数 ・1学期未満を「短期」
		在籍学生比率	長期	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	海外へ派遣した学生数÷在籍学生数
			短期	%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
指標5	海外からの受け入れ教員数		長期	人	0	0	0	0	0	・累計数 ・1年間以上を「長期」	
			短期	人	0	0	0	0	0	・累計数 ・1年間未満を「短期」	
指標6	海外への派遣教員数		長期	人	0	0	0	0	0	・累計数 ・1年間以上を「長期」	
			短期	人	0	0	0	0	0	・累計数 ・1年間未満を「短期」	
指標7	国連ボランティア(UNV)の参加者数		人	—	—	—	—	—	—	・累計数 ・春・秋の合計	

※指標3「海外からの学生の受け入れ」の「外国人留学生」(正規)は2009年度までは1年間の累計数。2010年度以降は当該年度5月1日現在の数字。(学校基本調査に合わせた。)

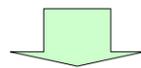
(その他の指標)
協定校と相互交流数(学生・教員)
国別国際交流協定締結先機関数
国別留学生数(学部別)の経年変化

★ 追加データがあれば追加してください。

◎効果が上がっている事項 ※目標の進捗評価が「A」の場合は必ず記述してください。

《点検・評価(1)》効果が上がっている事項 注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。

小項目 7.0.1	
★ 小項目 7.0.2	
その他	



【次年度に向けた方策(1)】伸長させるための方策

注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。

小項目 7.0.1	
★ 小項目 7.0.2	
その他	

◎改善すべき事項 ※目標の進捗評価が「D」の場合は必ず記述してください。

【点検・評価 (2)】改善すべき事項		注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。
小項目 7.0.1	理工学研究科の国際交流方針が明示されていない。	
★ 小項目 7.0.2		
その他		

↓

【次年度に向けた方策(2)】改善方策		注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。
小項目 7.0.1	国際交流方針の策定・公開を目指して理工学部国際交流推進委員会における議論を活発化させる。	
★ 小項目 7.0.2		
その他		

◎自由記述

【点検・評価】《次年度に向けた方策》	
★ その他 (自由記述)	

III. 学内第三者評価

<評価専門委員会の評価>

【学外委員】

○英語のみによる学位コースの設置に向けた検討が順調に進展しています。学生や教員の受け入れ派遣は積極的に進められており、大変優れています。もう自明なことかもしれませんが、国際交流の指針の明示はそれほど難しいことではないように思えます。これについて検討されることが望まれます。

【学内委員】

○理工学研究科の国際交流方針は具体的な明示に向けて検討中とのことですが、今後、速やかな設定と公表が望まれます。英語のみによる学位コースについては2012年度の開設を目指して現在検討中ということで、近年中の具体的な実現を期待します。海外からの受け入れ教員数は例年通りであり、また海外への教員の派遣数は学会発表を中心に増加傾向にあるため、この点は評価できます。

○理工学研究科としての国際交流の方針を早急に定めることを期待します。

○海外からの留学生は増加していますが、海外への派遣学生は依然として0名です。その不均衡はどこから生じるのか分析をお願いしたい。

○記述は適切です。方針の設定に期待します。

IV. 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

7.0.2(現状説明)

★ 本研究科のような理工系の大学院では、長期の留学はカリキュラム上難しいが、上述のように国際会議等への短期の派遣は盛んに行っている。